

巨人伝説と一向一揆
—伝承という歴史の記憶装置—

『文化人類学』最終講義（2016年1月29日）

小林 忠雄

巨人伝説と一向一揆 —伝承という歴史の記憶装置—

『文化人類学』最終講義 (2016 年 1 月 29 日)

小林 忠雄*

Received July 13, 2016

1 日本の巨人伝説

石川県には巨人の足跡だと伝える伝承地が 4 か所ある。

一つは金沢市の北方、河北潟に面した木越町に、俗に「たんたん法師」とか「大多(だいた)法師」と呼ばれた大男が、日本海から上がって来て第一歩を踏んだ足跡という場所である。そこには足の形をした草ひとつ生えない窪地があり、近くにその巨人が小便をしたという川もあって、通称小便川と名付けられていた。

この木越から南方約 10 キロメートル離れた、富山県との県境にある倶利伽羅峠近くの山中と、同じく西南方向へ約 40 キロメートル行った能美郡の波佐谷、さらにそこから少し海側によった片山津にも同様の巨人の足跡伝説地があった。

この大男、巨人の足跡伝承とは、そもそも何を意味しているのだろうか。

日本の民俗学の開祖である柳田国男は昭和 2 年、雑誌『中央公論』に「ダイダラ坊の足跡」という一文を発表した。その冒頭に「東京市は我日本の巨人伝説の一箇の中心地ということが出来る。我々の前住者は、大昔かつてこの都の青空を、南北東西に一跨ぎにまたいで、歩み去った巨人のあることを想像していたのである。而して何人が記憶していたのかは知らぬが、その巨人の名はダイダラ坊であった」と記している。

この柳田がとりあげた関東地方の巨人伝説には、他につぎのようなものがある。

その一つ、現在の京王線代田(だいた)駅付近にあるダイタ橋の謂われについて、「その昔、大多ぼっちという名の巨人が架けた橋」と伝え、またそこから東南へ 5, 6 町いった畠のなかに、長さ約百間(180 メートル)ほどの巨人の右片足の跡と目された窪地があった。

また玉電の駒沢付近にも二つの窪みがあり、いずれも清水が湧き出ているダイダラ坊の足跡としていた。柳田は、これらはすべて海の方から内陸に向かって闊歩したことになると指摘している。

さらに関東では『松屋筆記』に、相模野の大沼は、大昔ダイラボッチと称する鬼神が富士山を背負って行こうとして、足を踏ん張った時の足跡の窪みであり、この原に藤蔓が少ないのは、巨人が背負い縄にしようとして藤蔓を探したが少しも無かったことから、その腹いせに、ここでは今も藤は成長しないのだと伝えている。

これとまったく同じ話が横浜線の淵野辺駅近くの鹿沼や菖蒲沼でも伝えられ、それはデエラボッチが藤蔓を探し回ったが、蔓がどうしてもみつからなかったので、巨人が地団太踏んで悔しがってできた足跡だという。

山梨県に入るとレイラボッチという大力の坊主がいて、あるとき塩山と石森山の二つの山を麻殻(おがら)の棒で担ごうとしたとする話があり、その後この巨人は信州方面へ歩み去ったという。

*元 未来創造学部教授

東関東でも、千葉県茂原には二つのダイダッポの足跡が残り、また茨城県の手賀沼にはダイダラボーという巨人が棲んでいて、いずれも海からやって来たとしている。

北関東の下野では、昔デندنボメという巨人が羽黒山に腰をかけ鬼怒川で足を洗ったといい、すぐ側の二つの小さな沼は葦沼と称され、巨人の足跡と伝承している。

上野でもダイラボッチが赤城山に腰をかけ、うんと踏ん張ってできた足形の水溜りが赤沼だといい、そして同じく榛名の大男も赤城山に腰をかけ、利根川の水で足を洗ったというように、きわめてスケールの大きな伝承世界を物語ってきた。

関西の琵琶湖付近にも、信楽町の鮎川と黒川との境地に巨石があり、その石の上に巨人の足跡が残り、その昔ダダ坊とか大太法師という怪力の僧侶がいて、道に迷ったためこの石の上に立ち周囲を見渡したときの足跡と伝えている。(以上は主として柳田国男の著作物から引用)

さらに柳田の著作「大人弥五郎(おおびとやごろう)」には、九州の大分県に伝わり宇佐八幡神の家来とされた巨人弥五郎の話がある。この巨人は疫病神である牛頭天王や八幡神の御霊祭場にちなみ、人々の恐怖心から発達してきた神であると紹介している。その他、熊本県に巨人アマンジャグマ、沖縄にもアマンチュウという伝説がある。

一方、江戸時代にとっても人気のあった物語に、日本版ガリバー旅行記ともいえる朝比奈三郎の小人島遊記がある。特に江戸末期の刷り物として描かれた浮世絵師、国芳画の「朝比奈小人島遊」、芳幾画の「朝比奈ねむげざまし」は有名で、江戸の人たちの想像力を大いに刺激したものである。

その他、群馬県の妙義山には強弓の射手である百合若大臣が射抜いた「射抜穴」の伝説地があり、碓氷峠近くにそのとき踏ん張った足跡がある。



図1「山男」(江戸後期『遠州奇談』より)

静岡県の江戸後期に発刊された『遠州奇談』には「山男」の巨人の話が絵入りで載っており、またアラビアンナイトが江戸期で紹介されたなかに、魔法のランプを手にしたロック島の大王の巨人の刷り絵などがあり人気を博していた。

2 映画のなかの巨人

1900年、フランスのルミエール兄弟が営業を開始した映画は、世界の人々を大いに魅了した。なかでも映画が得意とした特撮、例えば突然姿が消える、あるいは今まで見たことも無いような奇怪な人間や動物が登場するなど、人々の想像力を刺激する映像が数多くつくられた。

初期の映画で、人間のスケールをはるかに超える巨大さを強調した特撮映画として代表的なのは、アメリカで1933年に制作された娯楽映画「キングコング」である。これは、巨大なゴリラが文明社会の象徴ともいえるニューヨークのエンパイアステートビルの最先端まで上り詰めるというシーンでよく知られている。しかもこの映画は、その後1976・1986・2005・2017年となんどもリメイクされてきた。アメリカにおける物語の人気の深さが感じられる。

この西洋の巨人という人知を超えた強大な力への願望は、これまで全く無かったのだろうか。もちろん18世紀初頭に、アイルランドの作家スウィフトによって書かれた風刺物語『ガリバー旅行記』はあまりにも有名である。つまり小人の国（リリパット国）を訪れたガリバーが巨人になってしまうという皮肉な物語設定で、この発想は後にオランダのデン・ハーグにつくられた遊戯施設マドローダムに使われた。

これは実物の25分の1に縮小されたオランダの代表的な建物などが、約2万㎡の敷地に詰め込まれた人気スポットである。建物だけでなく鉄道や船、車、人間までミニチュア化され、観光客は自分が巨人になったような感覚で楽しめる疑似ガリバー体験ができるのである。

19世紀初頭、ヨーロッパのスペイン王室の宮廷画家ゴヤが描いた「巨人」という作品がある。これはその少し前にフランスのナポレオン軍が、ピレネー山脈を越えて攻め込んできたのに対抗する巨人の姿を描いたもので、逃げ惑うスペイン民衆の前に立ち塞がり、髭もじゃの顔で筋骨隆々とした裸の巨人が、こぶしを振り上げて立ち向かっている光景が描かれている。

反戦思想家でもあったゴヤは、はじめフランスの皇帝を倒し共和国政治を執ったナポレオンを尊敬していたが、スペインに攻め入りマドリッドの市民に銃口を向けたフランス兵士に憤りを覚え、その怒りがこの絵を描かせた動機とされている。当時、ナポレオンは「ヨーロッパの巨人」と称されていたが、ゴヤはむしろスペインの守護神である巨人を描きたかったらしい。古くからの土着の思想のなかに巨人待望論のあったことを、この絵から窺うことができる。

日本でも太平洋戦争後、昭和29年（1954）に日本最初の空想科学トリック映画「ゴジラ」が、巨人というよりはゴリラとクジラのイメージを合成した大型怪獣映画として一世を風靡した。

この映画の背景には、その年日本の漁船、第五福竜丸が太平洋のビキニ環礁で行われたアメリカの水爆実験に遭遇、被災した事件とからませている。

つまり放射能の影響により、海底で急に肥大化した巨大な怪獣が人類へ報復するために出現したという想定で描かれた。ここには、将来いずれ大きな世界問題となるだろう原子力兵器に反対する、いわば反戦思想が根底に隠されていた。

また昭和41年（1966）に制作された映画「大魔神」も、戦国期、丹波の山奥の岩場に彫られた古墳時代の埴輪の兵士のような神像が、謀反を起こした悪家老の圧政に苦しむ領民を救うべく、怒りの形相の巨人に変身し、家老一味を滅ぼすという特撮映画であった。

折しも当時は第一次安保闘争と第二次70年安保闘争との中間にあり、かなり政情不安定であった。特に60年の反安保をかかげ国会を取り囲んだ全学連の学生たちには、この悪の枢軸ともいべき悪家老の権力に立ち向かう反権力の映画に、至極感動したとされている。

同じ年に、テレビによる空想特撮番組「ウルトラマン」があった。これもゴジラと同様のさまざまな怪獣や宇宙人と戦う変身ヒーローとして、子どもを中心に人気を博し、平均視聴率は40%を誇ったという。この場合のウルトラマンの特徴は、「シェワッチ」の掛け声で巨大な宇宙人に変化することであり、その身振りは当時の子どもの流行のしぐさにもなった。

このウルトラマン映像は正に宇宙時代の到来とともに未知なる世界の神秘性と、近い将来、いかなる異星人と遭遇するかなど、地球規模を超えた果てしなきグローバル世界を夢想したもののだけに、逆にテレビ画面のなかではより矮小化されてしまった感がある。

そして残ったのは正義の味方、悪を滅ぼすヒーロー（英雄）像のみが再生され、大衆娯楽のなかに埋没してしまった。

しかし、こうした映像表現の世界にいつも巨人が登場するのはなぜなのだろうか。

3 民衆社会と巨人願望

民衆が巨人を待望する心的要因として、次のような対象が考えられる。

- ① 巨人とは人間よりも大きな存在であり、とても敵わぬ相手なので、人々は常に見上げるばかりであるが故に崇敬せざるを得なかった。
- ② 宗教上では奈良、東大寺の大仏（盧舎那仏）は高さ5丈3尺5寸（約15m）であり、その巨大な仏像が古くから知られ、長期にわたり根強く信仰されてきた。（モデルは中国、雲崗や龍門の石窟寺院にある。）
- ③ 日本の神話に表された大国主命（大己貴命）は小人の少彦名命を従え、全国平定に乗り出した。伊弉諾尊が黄泉の国から戻り、左目を洗うと太陽（天照大神）が生まれ、右目を洗うと月（月読命）が生まれ、鼻を洗うと嵐（素戔鳴命）が生まれたと記されたもので、いずれも巨人として表現されてきた。

このような日本人の精神的な象徴構造として言えることは、日本人の基本的な性格である自分たちより巨大な力、偉大な力をもつ巨人のような存在を、常に待望し続けてきた歴史が考えられる。島国であるが故に狭い地域で暮らす農耕民族にとって、大きな社会変革は到底考えられず、神話の時代からひたすらヒーローを夢見待ち続けてきたにすぎなかった。

つまりこの場合の精神構造はあくまで他力本願であって、自力本願の世界ではない。寄らば大樹の影、巨大な権力の傘の下の庇護にあるしか考えてこなかったのもあって、換言すれば体制依存型志向であり、非革命的な共同体維持の志向でしかなかった。

しかし唯一、日本史のなかではまったく異端の時代があった。それが一向一揆である。

一向一揆とは、15～16世紀に浄土真宗本願寺派門徒（これを一向宗徒と称した）によって起こされた民衆一揆。京都大谷の親鸞廟墓から発展した本願寺は、中興の祖ともいう8代法主蓮如により活況を呈したが、これを危惧した天台宗延暦寺僧徒と衝突、寛正6年（1465）に最初の一向一揆が起きた。

そこで蓮如は越前吉崎に拠点を移し、北陸一帯の密教寺院を真宗に変え、また民衆救済の宗教として布教し、多くの門徒を増やし、教線を拡大していった。

そしてついには各地の戦国大名とも武力抗争を始め、なかでも加賀では長享2年（1488）、加賀国の守護職、富樫正親の居城高尾城を攻め落とし、「百姓の持ちたる国」というわが国では最初の共和国を樹立した。その後、この共和国政治は織田信長の家臣、柴田勝家の軍勢に敗れた天正8年（1580）まで約100年間続けられた。

この一向一揆を指導したのは、蓮如により直接創設された賀州三カ寺で、若松の本泉寺、波佐谷の松岡寺、山田の光教寺であり、それらは俗に「大坊主（おおぼうず）」と呼ばれた。またその後、木越の光徳寺も加わり、これらは数多くの門徒をかかえる一向宗の大寺院（根本道場）と

なった。

三州奇談
江戸後期の金沢の俳
人、堀麦水によって書
かれた加賀・能登・越
中の三州に伝わる奇談
(変わった話) 集。

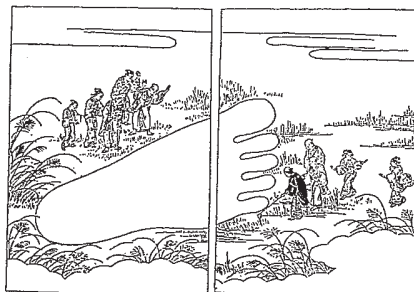


図2 光林寺の跡で大太法師の足跡を見物する人々

一向一揆研究の第一人者、井上鋭夫によれば、蓮如ははじめ琵琶湖や若狭から日本海を北上する舟運を利用して教線を拡大したことから、はじめから綿布や絹布を扱う商人や金属・染色関係の職人、酒造などの醸造業といった当時の先端的化学技術を駆使した人々を門徒にした。しかも彼らは一揆のオルガナイザーとしての資質をいかに発揮したものとみられる。(井上鋭夫『一向一揆の研究』1968 吉川弘文館、同『山の民・川の民—日本中世の生活と信仰—』1981 平凡社)

この真宗の拠点道場は人々からなぜか「大坊主」と呼ばれた。ちなみにこの「大坊主」という言葉にはある種の修行僧に見られるような、厳しい修行の場を潜り抜けてきた宗教者としての威厳が感じられる。多くの門徒はその威厳に満ちた指導者に尊敬の念を抱いてきたのだろう。

またこの「大坊主」の表現の背景には、加賀を中心とした北陸の白山信仰とも関わっている。すなわち神仏混淆時代の白山山頂群の一つは阿弥陀如来に比定され、同時に阿弥陀仏は八幡神として尊ばれてきたことから、なぜか加賀地方には八幡神社が多く祀られている。

このことは前述したように八幡神の家来に大人弥五郎がおり、この巨人弥五郎のイメージが、八幡信仰によって喧伝され信州門徒に浸透した可能性もある。

日本海をわたってきた大坊主、ダイタ法師(ダイタボッチ)とは蓮如をはじめとする本願寺の指導者たちのことであり、多くの民衆救済を求めた宗教集団ではなかったか。その集団がその後一向一揆へと結実したのである。一向一揆とは時の権力者(為政者)の無謀な政治に対する反抗勢力であり、そこには民衆擁護の御旗、正義(=南無阿弥陀仏の六字名号)が貫かれていた。

このような宗教思想は親鸞以来の基本的性格であり、建保2年(1214)に、特に越後の流罪から放免された親鸞は、その3年後家族や弟子たちとともに関東に赴き、笠間を中心に精力的に東国布教の活動を行った。したがって関東には真宗色の濃い伝承世界が展開され、本稿の冒頭に示したように、大坊主、ダイダラボッチの数多くの巨人伝説が残されたのではなかろうか。

そして一向一揆が滅ぼされた後も、一向宗徒はこのときの事件をいわば歴史事象の記憶装置として伝えたのがこの巨人伝説、すなわちダイダラボッチの話ではなかったか。それは文字を持たない民衆にとって書き残すことさえ許されなかった時代に、きわめて慎重に工夫された民衆の知恵であったに違いない。

今、私たちをとりまく現実社会には、すぐ身近かにもさまざまな理不尽な行為がまかり通っている。しかし大半の人たちは抗うことなく、長いものに巻かれるまま自らを律することなく見過ごそうとしている。

学問とは何のためにあるのか。一つは不正を見抜き、不合理な権力に立ち向かう優れた判断力

を身につけることであり、もう一つはそれを克服する、あるいは戦い勝つための方策と手段、それらの知恵を学ぶことである。

かつて「巨人、大鵬、卵焼き」と、今の大人たちが子どもの頃に憧れ願望を表現した流行のフレーズによる巨人のイメージは、他力本願的な体制維持とぬくぬくとした安住の世界を指しているようにしか見えない。社会を変革し、より良き社会環境をつくりたいならば、自らが巨人になること、自分のなかの巨人を惹起するしかないだろう。学生たちよ、大学生活では鋭い社会観察と、常にさまざまな思考をめぐらし、ぜひとも優れた知恵の泉を養ってください。おわり。

小林忠雄先生の最終講義にあたって

未来創造学部 国際教養学科
教授 長谷川 孝徳

小林先生は日本民俗学者として多数の御著書、論文を世に出していらっしゃることは、周知のとおりです。なかでも、都市民俗学の視点からの『都市民俗学—都市のフォークソサエティー』（名著出版）、『色彩のフォークロア』（雄山閣出版）、『江戸・東京はどんな色』（教育出版）、『金沢、まちの記憶 五感の記憶』（能登印刷出版部）は、他分野の研究者からも大変評価の高いものです。

ところで、私に「小林忠雄先生の最終講義にあたって」と題して執筆の依頼があったのは、本学で最も旧知の仲であるから、ということでした。私と先生との出会いは、37年ほど前にさかのぼります。石川県立郷土資料館に赴任した時に、所属の課は違いましたが民俗担当の上席の学芸員としてご勤務されていました。既に『能登—寄り神と海の村』（日本放送出版協会）をご出版され、若手の民俗学者としてご活躍されていました。

その後、石川県立歴史博物館で、私の配属先の資料課長として、国立歴史民俗博物館へ転任されるまでの4年間、上司部下の関係で一緒にさせていただきました。この間、専門分野は異なりましたが、調査や展覧会企画など一緒にさせていただき、多くのことを学ばせていただきました。

なかでも、ものごとを見る視点を常に変えること、まったく違った観点からの切り口により、様々なことが分かりやすく見えてくることなどを学び、その後の私の研究方法に大いに役立ちました。

こうした研究方法から、小林先生は特に都市民俗への先駆者としてご活躍され、前述のご著書をはじめ『都市の民俗・金沢』（国書刊行会）、『都市民俗学へのいざない』Ⅰ・Ⅱ（雄山閣出版）、「複製技術社会の民俗—近代都市金沢における新色音論」（『国立歴史民俗博物館研究報告』24集）など、多くの著書論文をご執筆されました。また、石川県内の市町村史をはじめ、千葉県や東京都の自治体史の民俗部門でも編集委員をお務めになられ、調査執筆も行ってきました。

さらに、民俗学的見地から金沢市景観審議会委員など、国・自治体の様々な公職もお務めになられ、現在も引き続き各種委員に就任しています。

小林先生は、国立歴史民俗博物館から東京家政学院大学を経て未来創造学部設置ということで転任し、その後、私も本学に赴任し、再び同じ職場で一緒にすることになりました。最終講義を拝聴し、この37年間のことを思い出しておりました。

これからも、ますますのご活躍をお祈りし、また、今までのご指導に感謝申し上げます。ありがとうございました。